

ダニエル書 - 第五十三号

明らかにされた預言的な幻：ダニエルの体験を通して終わりの日々を理解する

Jeff Pippenger

2024-01-17

すべての預言者たちは、自分たちが生きた時代よりも、終わりの時代について多く語っている。

昔の預言者たちはそれぞれ、自分たちの時代のためというよりも私たちのために語った。ゆえに、彼らの預言は私たちに対して有効である。『これらのことが彼らに起こったのは、模範とするためであり、またそれらは、世の終わりが臨んだ私たちへの戒めのために書かれている。』コリント第一 10:11。『彼らは自分自身のためではなく、私たちのために、これらのことを伝える務めに当たったのであり、そのことは今や、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々によって、あなたがたに告げ知らされている。これらのことは、天使たちでさえもつぶさに見たいと願っている。』ペテロ第一 1:12

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

ダニエルは神の民を代表している。彼らは終わりの時代に、預言のこぼれを通して、自分たちが散らされてきたことを知ったのである。彼らがその事実を目覚めると、レビ記二十六章の祈りをささげること、そして（第二章のダニエルの祈りに示されているように）猶予期間が終わる直前に封印が解かれる最後の預言的な秘密を理解するための祈りをささげることが求められる。もし彼らがダニエルの経験にあずかるなら、そのとき、彼らに「洞察力と理解力」を与えるために、御使いガブリエルが彼らに触れ、知らせ、語りかけるだろう。賢い者とは、預言の秘密の封印が解かれるときに、「知識が増し加わること」を「理解する」者たちである。

彼は私に知らせ、語りかけて言った。「ダニエルよ、私は今、あなたに知恵と悟りを授けるために来た。あなたが祈り始めたときに命令が出され、私はそれを知らせるために来た。あなたは大きい愛されているからである。ゆえにこの事を悟り、この幻を思いめぐらせよ。」ダニエル書 9:22-23

ダニエルが心に留めるよう命じられているのは、「mareh」と呼ばれる現れの幻である。ガブリエルは、「mareh」の幻をダニエルに理解させよと第八章で命じられた時点では、彼に課せられていた務めをまだ終えていなかった。第九章では、彼はその解釈を完了するために戻ってきた。第九章では、ダニエルはもはやバビロン王国の時代に生きているのではなく、メド・ペルシャ帝国の歴史の中にいる。

ガブリエルがダニエルに「事柄を理解せよ」また「幻を考えよ」と命じるとき、彼はダニエルに実践してほしい心の中で区別する過程を指し示している。「理解する」と「考える」と訳されている語は、同じヘブライ語である。その語は“biyn”で、心の中で区別することを意味する。「事柄」と訳されているヘブライ語は“dabar”で、「言葉」を意味する。したがってガブリエルは、ダニエルに、そして終わりの日に彼が代表する者たちに、真理の言葉を正しく分けるよう告げている。

神に認められた者として自分を示すよう努め、恥じる必要のない働き人として、真理の言葉を正しく扱いなさい。テモテへの第二の手紙 2:15.

“matter” という語は、ダニエル書10章1節でも用いられており、そこでは3回 “thing” と訳されている。

ペルシアの王クロスの第三年に、ダニエル、すなわち名をベルテシャザルと呼ばれた者に、一つの事が示された。その事は真実であったが、その定められた期間は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。ダニエル書 10:1.

その節では、「vision」という語は、姿を示す「mareh」の幻を指し、ダニエルは事 (matter) と幻 (「mareh」) の双方を理解していた。9章23節では、ガブリエルはダニエルに、事柄と幻を正しく区別するよう指示し、10章1節では彼は事 (thing) と幻 (「mareh」) の双方を理解している。9章でガブリエルは、事柄と幻の区別 (正しく分けること) を認識するようダニエルに伝えている。幻は「mareh」の幻であり、「matter」、すなわち「thing」は「chazon」の幻である。

第8章では、両方の幻が明確にされ、区別が示されている。というのも、ダニエルは「chazon」の幻を理解したいと望んだが、ガブリエルにはダニエルに「mareh」の幻を理解させるよう命じられていたからである。ガブリエルが「事柄」と「幻」をダニエルに理解させる務めに取りかかるにあたり、彼はそれらが二つの異なる幻であることに注意するようダニエルに告げる。

彼は私に悟らせ、私に語って言った。「ダニエルよ、私はあなたに知恵と理解を与えるために今来た。あなたが祈りをささげ始めた時に命令が出され、私はそれを知らせるために来た。あなたは非常に愛されているからだ。だから、この事を悟り、この幻をよく考えよ。あなたの民とあなたの聖なる都のために七十週が定められている。それは、背きを終わらせ、罪に終止符を打ち、不義のための贖いを成し、永遠の義をもたらし、幻と預言に封印をし、いと聖なるものに油を注ぐためである。だから知り、悟れ。エルサレムを復興し建て直せとの命令が出てから、メシアなる君に至るまで、七週と六十二週がある。その間に通りも城壁も再建されるが、苦難の時にあつてである。その六十二週の後、メシアは断たれるが、彼自身のためではない。来るべき君の民が、その町と聖所を滅ぼし、その終わりは洪水のようで、戦いの終わりまで荒廃が定められている。彼は一週の間、多くの者と堅く契約を結び、その週の半ばに、いけにえと供え物をやめさせる。忌むべきものがはびこることのゆえに、彼は荒廃をもたらし、ついに完結に至るまで続く。定められたものが、荒れすたれた者の上に注がれる。」
ダニエル書 9:22-27

ガブリエルは、彼がダニエルに与える解釈には、“chazon”の幻と“mareh”の幻の双方の要素が反映されるのだと、ダニエルに認識してほしいと望んだ。その解釈は両方の幻に言及するものであり、聖所と軍勢が踏みにじられることを扱う幻と、1844年10月22日に至聖所におけるキリストの出現へと至る幻とを正しく区別することは、ダニエルの責任であった。

ガブリエルは、紀元前457年のアルタクセルクセスの勅令から、「夕と朝の幻」の2300年から「切り離された」490年が、特にユダヤ人のためのものであることを明らかにしている。先に引用した節々では、「定められた」という語が3回出てくるが、訳ではいずれも「定められた」とされているものの、実際には異なるヘブライ語が二つ用いられている。最初に「定められた」が現れるのは24節で、そのヘブライ語は「chathak」で、「切り離す」を意味する。

それは、イスラエルに与えられた猶予期間がアルタクセルクセスの第三の勅令から始まり、西暦34年のステパノの石打ちで終わることを示している。四百九十年は「切り取られ」たもので、二千三百年というより長い預言の中に含まれる、より短い預言的期間を表していた。「四百九十」という数は、イエスによって証しされているように、猶予の時の象徴である。

そのとき、ペテロがイエスのもとに来て言った。「主よ、兄弟が私に対して罪を犯したなら、私は何回まで彼を赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。」イエスは彼に言われた。「七回までとは、あなたに言わない。むしろ、七の七十倍までである。」マタイによる福音書 18:22

許しには終わりがあり、その終わりは「四百九十」という数字で示されている。「四百九十」年は、ユダヤ人に与えられた猶予期間を表しており、彼らの解放から、ステパノが石打ちにされたときに彼らの猶予期間の杯が満たされるまでの期間である。「四百九十」年はまた、レビ記二十六章の「七倍」の呪いとも結びついている。聖書の中で、地がその安息を享受することに言及している箇所は二か所しかない。最初のものはレビ記二十六章にある。

それでもなお、このすべてにもかかわらず、あなたがたがわたしに聞き従わず、わたしに逆らって歩むなら、わたしもまた怒りをもってあなたがたに逆らって歩み、わたし、まさにこのわたしが、あなたがたの罪のゆえに七倍にして懲らしめる。あなたがたは自分の息子の肉を食べ、あなたがたの娘の肉を食べる。わたしはあなたがたの高き所を破壊し、あなたがたの像を切り倒し、あなたがたの偶像の死骸の上になんかあなたがたの屍を投げ捨てる。わたしの魂はあなたがたを忌み嫌う。わたしはあなたがたの町々を荒れ果てさせ、あなたがたの聖所を荒廃させ、あなたがたの香ばしい香りを嗅ぐことをしない。わたしはその地を荒廃させる。その中に住むあなたがたの敵は、これに驚きあきれぬであろう。わたしはあなたがたを異邦の民の間に散らし、あなたがたの後に剣を抜き放つ。あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町々は荒れ果てる。そのとき、地はその安息を楽しむ。それが荒れ果て、あなたがたが敵の地にいる間、地は休み、その安息を楽しむ。それが荒れ果てている間、地は休む。あなたがたがその上に住んでいたとき、あなたがたの安息の間、地は休まなかったからである。レビ記 26:27-35.

第二十六章で四度言及される「七つの時」の罰は、神の民が散らされる時、地が「その安息を享受する」ことになることと示している。ダニエルと三人の勇士はモーセの呪いの成就として敵の地に散らされ、七十年にわたる散らしは二千五百二十年の散らしの象徴的な実物教訓であった。それは、イゼベルの迫害のさなかに起こったエリヤの三年半の干ばつに類する、予言的な実物教訓であった。その三年半は、預言的な三年半を表し、538年から1798年までの一千二百六十年に及ぶ教皇支配に等しかった。三年半が一千二百六十年の荒野の期間の象徴であったのと同様に、その七十年は「七つの時」の象徴であった。エレミヤによって示されたダニエルの捕囚の七十年は、「四百九十」年を表していた。

彼らの先祖の神、主は、その民とその住まいをあわれまれたので、朝早くからたびたび使者を彼らのもとへ遣わされた。しかし彼らは神の使者たちをあざけり、その言葉をさげすみ、預言者たちを虐待し、ついに主の怒りがその民に向かって燃え上がり、いやす術がなくなるに至った。そこで主はカルデア人の王を彼らの上に来させ、彼は彼らの聖所の中で若者たちを剣にかけ、若い男にもおとめにも、老人にも、年のために腰を曲げている者にも、あわれみをかけなかった。主は彼らを皆、その手に渡された。神の家の器は大小すべて、主の宮の宝物、王とその君たちの宝物も、彼はことごとくバビロンへ携え去った。彼らは神の家を焼き、エルサレムの城壁を打ち壊し、そのすべての宮殿を火で焼き、その貴い器物をことごとく滅ぼした。剣をのがれた者たちも彼はバビロンへ捕え移し、そこで彼らは彼とその子らに仕え、ペルシャの王国の治世に至るまで続いた。これは、主がエレミヤの口によって語られた言葉が成就し、地がその安息を享受するためであった。地は荒れ果てているあいだ安息を守り、七十年が満ちるまで続いた。さて、ペルシャの王キュロスの第一年に、主がエレミヤの口によって語られた言葉を成就されるため、主はペルシャの王キュロスの霊を奮い立たせられたので、彼はその全王国に布告を出し、また文書にもして言った。「ペルシャの王キュロスはこう言う。天の神、主は地のすべての王国を私に与え、ユダにあるエルサレムに、彼のために宮を建てよう私に命じられた。彼の民すべてのうち、あなたがたの中にだれかいるなら、その者は上って行くがよい。主、その神がその者とともにおられるように。」歴代誌下 36:15-23

聖書で「地がその安息を享受する」と言及されるのは二箇所だけであり、いずれも神の民が散らされることと、地がその安息を享受できるようにする期間を表す七十年の捕囚に関してである。それは、ユダヤ人が地に安息を与えなかった安息年の数に等しかった。地が七十年休んだことは、地に休ませよという戒めに逆らってきた年数の総計を示していた。簡単な計算で、「四百九十」年に及ぶ反逆の間に、地が休まなかった年は合計七十年になることがわかる。

ユダヤ人のための猶予期間として、二千三百年から四百九十年が切り離され、その「四百九十」年はレビ記二十六章の「七たび」に伴う離散と直接の関係がある。

踏みにじりに関する「chazon」の幻と、二千三百年の終わりにおける出現に関する「mar eh」の幻は、互いに別個のものだが、直接的なつながりがある。ダニエルがそうであったように、神の民はこの二つの幻を正しく区別すると同時に、互いの関係を認識すべきである。ユダヤ人がエルサレムに帰還して再建することを許可した三つの勅令へとつながった七十年の捕囚は、地を休ませるという契約に対してユダヤ人が反逆した「四百九十」年を表していた。

第三の勅令が彼らの帰還と再建の機会を明らかにしたとき、彼らには「四百九十」年の猶予期間が与えられた。これは、彼らの不従順がエルサレムの破壊と彼らの離散を招いたのと同じ長さの期間にわたって彼らが試されるためであった。二度目の「四百九十年」の終わりには、彼らの不従順が再びエルサレムの破壊と、異邦人への彼らの離散をもたらすことになる。

七十年の捕囚による離散に先立っては「四百九十」年の反逆があり、その七十年の捕囚の後には、さらに別の「四百九十年」にわたる反逆が続いた。

地の安息の七十年をもたらした最初の「四百九十年」は、エルサレムの破壊によって結末を迎えた。二千三百年から切り取られた「四百九十年」の終わりに、エルサレムは再び滅ぼされた。イエスは常に、物事の終わりをその始まりによって示すからである。

文字どおりのイスラエルが文字どおりのバビロンで七十年間捕囚となったことは、「七つの時」の離散の象徴であり、ホワイト姉妹は、その七十年の捕囚が、霊的なイスラエルが霊的なバビロンで千二百六十年間捕囚となることの型であると指摘している。

「地上の神の教会は、この長く容赦のない迫害の期間中、捕囚の期間にイスラエルの子らがバビロンで囚われていたのと同様に、まさしく捕囚の状態に置かれていた。」
『預言者と王たち』714ページ。

538年から1798年までの1260年間は、「七つの時」の型であった。七十年の終わりに、ユダヤ人はエルサレムを回復し再建するために帰還した。三つの勅令の下での彼らの帰還は、「mareh」幻視の二千三百年の始まり（紀元前457年）を画し、それは1844年10月22日にキリストが至聖所に顕現することへと導いた。三つの勅令は預言的期間の起点を画し、キュロスの第一の勅令によって彼らは帰還と再建を始めたが、預言的期間が始まるには三つすべての勅令が必要であった。

「エズラ記第七章にその勅令が見いだされる。12-26節。最も完全な形において、それはペルシヤの王アルタシャスタによって紀元前457年に発せられた。しかし、エズラ記6:14には、エルサレムにおける主の家が『クロスとダリヨスとペルシヤの王アルタシャスタの命令〔欄外注「勅令」〕にしたがって』建てられたと記されている。これら三人の王は、その勅令を起こし、再確認し、完成させることによって、2300年の始まりを示すために預言が要求した完全性へとそれを至らせた。勅令が完成した時、すなわち紀元前457年をその命令の日付として取るならば、七十週に関する預言のあらゆる規定が成就していたことが明らかになった。」『各時代の争闘』326頁。

1798年から1844年にかけて、黙示録の三人の天使が預言的歴史に登場した。そして、三つの勅令が二千三百年の預言の始まりを画したのと同様に、その三人の天使がその預言の終結を画した。預言の期間は第三の天使の到来とともに終わったが、それは第三の勅令の到来とともに始まったのと同じである。というのも、イエスはいつも、物事の終わりをその始まりと結びつけて示されるからである。

ユダヤ人は最初の勅令に基づいて帰還を始め、第二の勅令の時代に神殿を完成させた。第三の天使は1844年10月22日に到来し、その日以前に、ミラー派は霊的なバビロンから出て再建しようとしていた霊的な神殿を完成させていた。それは完成していなければならな

った。というのも、1844年10月22日に契約の使者が突如その神殿に来ることになっていたからである。その神殿とは、1844年10月22日に契約に入ったミラー派の民であり、ペテロが神殿であると見なした人々であった。

あなたがたも、生ける石のように、霊的な家に建て上げられ、聖なる祭司として、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊的ないけにえをささげるためである。
第一ペテロ 2:5.

ミラー派の神殿は1798年から1844年にかけて建てられた。これは46年、すなわち預言的には三日に当たる。キリストが神殿を三日で建て直すと述べたからである。

ユダヤ人の過越祭が近づき、イエスはエルサレムに上られた。そこで神殿の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと、両替人たちが座しているのを見つけられた。イエスは縄でむちを作り、彼らを皆、羊も牛もろとも神殿から追い出し、両替人の金を撒き散らし、台をひっくり返された。そして鳩を売る者たちに言われた、「これらをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」弟子たちは、「あなたの家に対する熱心がわたしを食い尽くした」と書いてあるのを思い出した。そこでユダヤ人たちはイエスに言った、「あなたがこんなことをしている以上、どんなしるしをわたしたちに示してくれるのか。」イエスは答えて言われた、「この神殿を壊してみなさい。わたしは三日のうちにそれを建て直す。」ユダヤ人たちは言った、「この神殿は建てるのに四十六年かかったのだ。それをあなたが三日で建て直すというのか。」しかしイエスの言われた神殿は、ご自身の体のことだった。ヨハネによる福音書 2:13-21.

ホワイト姉妹は、マラキ書に描写されている契約の使者が突然その宮に来るという出来事が、ヨハネの箇所を示されているとおりに、キリストが宮を清められたときに成就したと指摘している。

イエスは、神殿を世の売る者や買う者から清めることによって、心を罪の汚れ—魂を墮落させる地上的な欲望、利己的な情欲、悪しき習慣—から清めるというご自分の使命を宣言された。「見よ、わたしはわたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を備える。あなたがたが求めている主は、にわかにもその宮に来られる。すなわち、あなたがたが喜ぶ契約の使者が。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、だれがその来臨の日に耐え得ようか。彼が現れるとき、だれが立っていられようか。彼は精錬する者の火のようであり、洗う者の灰汁のようである。彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金と銀のように精錬して、彼らが主に義によるささげ物をささげるためである。」マラキ書 3:1-3. 各時代の希望、161.

ヨハネによる福音書2章の神殿は、建設に四十六年を要し、イエスは壊された神殿を三日のうちに建て直すと言われた。1798年から1844年までは四十六年であり、それは、二千三百年の預言を開始させた三つの勅令によって予表されていた、黙示録14章の三人の天使（日）の到来を指し示している。この四十六年は、キリストがミラー派の神殿を建て上げられた期間である。というのも、それ以前には、霊的な聖所と霊的イスラエルは霊的バビロンによって踏みにじられていたからである。

キリストがその宣教の初めに過越の祭りのとき神殿を清められたとき、彼は、マラキ書に記されている「契約の使者が突然その宮に来る」という預言を成就しておられた。1844

年10月22日、キリストは突然ご自身の神殿に来られ、滅ぼされたご自身の神殿を再建するのに四十六年を要していた。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

第一の御怒りは1798年に終わり、最後の御怒りの終わりは1844年であった。キリストがミラー派の神殿を興された四十六年の期間の始まりは終わりを示していた。というのも、その始まりも終わりも、神がご自分の民に対する御怒りの終結によって特徴づけられており、イエスはいつも、ある事柄の終わりをその事柄の初めと結びつけて示されるからである。

今回の記事で、ガブリエルがダニエルに与えた教えについての学びを続けます。

ヨハネの黙示録は人々に開かれなければならない。多くの人はそれを封印された書と教えられてきたが、それが封印されているのは、真理と光を退ける者にとってだけである。その中に含まれている真理は宣べ伝えられなければならない。人々が、間もなく起ころうとしている出来事に備える機会を持てるように。第三天使のメッセージは、滅びゆく世界の救いの唯一の希望として提示されなければならない。

「終わりの日々の危難が私たちに臨んでおり、私たちの働きは、人々が置かれている危険を警告することである。預言によって間もなく起こると示された厳粛な場面に、触れずにいてはならない。私たちは神の使者であり、無駄にできる時間はない。私たちの主イエス・キリストの同労者であろうとする者は、この書に見いだされる真理に深い関心を示すであろう。彼らは筆と言葉をもって、キリストが天から来て明らかにしようとした驚くべき事柄を、平易に示そうと努めるであろう。」 Signs of the Times, 1906年7月4日。